

# 第1回 京都府教育振興プラン検討会議 概要

## 1 日 時

平成21年11月16日（月）午後2時45分～午後4時45分

## 2 場 所

京都府公館 第5会議室

## 3 出席者

委員 片岡委員、ベッカー委員、小寺委員、西岡委員、原委員、藤井委員、山本委員  
（委員8名中7名出席）

事務局 田原教育長、宮野教育次長、高熊指導部長、水江教育企画監 他

## 4 内 容

京都府の教育をめぐる現状認識及び目指すべき人間像について

次第 教育長あいさつ  
委員及び出席者紹介  
事務局説明1（設置趣旨等について）  
座長・副座長選出  
事務局説明2（京都府の子どもの現状について）  
意見交換・協議  
（1）京都府の教育をめぐる現状認識について  
（2）目指すべき人間像について

## 5 資 料

京都府教育振興プラン検討会議設置要綱 / 委員名簿

パンフレット「『京の子ども、夢・未来』プラン21 - 京都府の教育改革 - 」等2種

教育振興プラン策定の概要等

京都府の子どもの現状

=====

### 教育長あいさつ

教育基本法の改正により、各教育委員会には教育振興基本計画の策定が努力義務とされた。「京の子ども、夢・未来」プラン21の策定から10年が経過していること、府の新しい総合計画の策定が進められていることなどから、新しいプランをできるだけ早い時期に策定していきたい。プラン21が策定されてからの10年を振り返ると、教育基本法の改正や学習指導要領の改訂などの歴史的な教育改革が進められており、次代を担う子どもたちをどう育てていくかが大きな課題になっている。

京都府では、市町村にとって必要な教員配置数をお渡ししてその活用方法は現場に委ねる手法で国からも注目されている「京都式少人数教育」をはじめ、「心の教育」学習資料集「京の子ども 明日へのとびら」の書き下ろし、PTAが主体となって就学前の子どもを持つ親

を対象に開催する「親のための応援塾」、小学校時点のつまずきに中学のできるだけ早い時点で対応する「ふりスタ」など、多くの施策を全国に先駆けて実施してきた。

教育は国の根幹であり、その基本的な方向を国が考えることは当然であるが、地方の実態に即した実際の教育をどう進めていくべきかが最も重要であり、府としてゆるぎのない計画を策定していかなければならない。委員の皆様の幅広く深いご見識やご経験に裏打ちされたご意見を沢山頂戴しながら、京都府の教育の振興に向けた計画を策定していきたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

## 事務局説明 1（設置趣旨等について）

### 会議の公開に関する取扱い等について

会議は原則公開で運営し、概要をホームページで公開する。

### 設置趣旨について

府がプラン21を平成13年に策定してから約10年が経過したこと、平成18年に教育基本法が改正されたことなどから、社会の変化に対応した新たなプランが必要。なお、新たな京都府総合計画の検討が進められており、その議論も踏まえる必要がある。

まずは第1次案として2月中に、京都府の教育の基本理念となる府の目指すべき人物像と、その理念を実現するために必要な力を示すとともに、その理念の実現に向けて今後10年間に推進すべき施策の方向性や視点について示したい。

第2次案では、特に重点的に進めていくべき項目について、6月中を目途にまとめたい。最終は12月に決定してまいりたいと考えている。

### 議論の経過について

プラン策定に当たっては、市町村教育委員会や学校関係者のみならず、有識者や府民の皆様の幅広い意見をいただくことが大切と考えており、これまでも数回にわたって意見交換の場を設けてきた。

そこでいただいた「目指すべき人間像」についての意見を資料にまとめている。資料にはないが、つい先日、府全体の教育委員の研修会において義務教育のあり方について市町組合教育委員と府の教育委員との意見交換を行った。

## 座長・副座長選出

検討委員会設置要綱の第4条第2項に基づき、座長に小寺委員を、同条第4項に基づき、副座長に西岡委員を選出した。

## 事務局説明 2（京都府の子どもの現状について）

### 子どもの学力について

全国学力・学習状況調査の知識問題（A問題）の正答率を見ると、基礎・基本の力はほぼ定着していると考えられる。なお、小6では府の平均正答率が全国水準を上回り、中3ではやや下回っている。活用問題（B問題）については、年度や教科にばらつきは

あるものの正答率は低く、知識・技能を活用する力に課題があると言える。全国平均との比較については、知識問題と同様である。

高校への進学率はこの5年間であまり変化はないが、大学等への進学率は大幅に増加している。全国と比較しても府の進学率は高い。

#### 子どもの体力について

昭和60年度の体力水準と比較すると、体力・運動能力調査の多くの種目で平均値が右肩下がりである。小中とも男子は全国平均をやや上回り、女子はやや下回っている。学校での体力向上の取組のひとつである運動部活動への加入率は、府の中学では減少傾向、高校では増加傾向にある。ただし、女子の加入率は男子より低い。

#### 学校での子どもの様子について

暴力行為発生件数は平成18年度から私立・国立学校での件数も含むこととなったため大幅に増加しているが、小中ではその翌年でもさらに増加している。不登校児童生徒数は、小中では概ね14年度あたりから減少傾向にある。ただし、中学の不登校生徒数は小・高との単純比較でも4倍前後あり、中学での生徒指導上の課題が大きいことが分かる  
いじめの認知件数は、18年度にいじめの定義が変更されたことから大きく増加しているが、減少又は横ばい傾向にある。

#### 小学生から中学生への子どもの意識や生活の変化について

意識面では、小学では7割以上の子どもが「挑戦する気持ち」「自己肯定感」「将来への夢」を持っているが、中学になるとその割合が低くなる。また、9割前後の子どもが「人の気持ちがわかりたい」「人の役に立ちたい」と答えており、この点では小学から中学への意識の変化も少ない。

生活面では、テレビやDVDを毎日2時間以上視聴している子どもが小中とも7割近いほかは、「11時以降の就寝」が小22.3% 中74.4%、「読書時間が10分未満」が小40.8% 中59.0%、「携帯電話所持率」が小32.9% 中69.4%となるなど、学年が進むにつれて普段の生活に大きな変化が生じている。勉強時間については、時間の長い子どもと短い子どもの2極化が中学で進んでいる。

#### 意見交換・協議（主な意見）

色々な学校の授業等の様子を見せてもらって、同じ日本の学校、同じ京都府内の学校であっても、その様子はまったく違うと感じている。

地域が異なれば学校が抱える課題も異なるが、そうした地域にあっても課題を克服している学校もある。そこでは、校長のリーダーシップや教員同士のチームワーク、保護者や地域の人々やボランティアの協力等のもと、様々な努力がなされている。

学校の課題にあわせて加配を使えるという府の取組は非常によい。こうした府の取組をさらに進めてほしい。

私が関わっている高校では、入学式等では私語ひとつなく、廊下で生徒に会うときちゃんと挨拶してくる。まもなく社会に出ることを見据えて、教員が厳しい指導を行うと同時に、「教育の根本は家庭」ということを徹底してきた成果だ。せっかくこうした他のモデルとなるような素晴らしい学校があるのだから、その取組をどんどん広めて欲しい。

同じ府立の高校でも違いが大きい。地域の事情や学校の文化といった根幹の違いもあるが、どんな教員がいて、どんな教育理念のもとでどんな指導をしようとしているのか、どのように地域と関わるかなど、その違いには色々な要因がある。素晴らしい教育を行っている学校があるがゆえに、そうではない学校にどう広げていくかが大きな課題。

学校の教育方針は校長を中心につくられているが、それがどれだけ具体的なものになるかは教職員の意識によるところが大きい。

国も府も、地域に根ざした教育を目指して、コミュニティの個性や学校の個性を活かす取組を進めてほしい。地方の復権は文化の復権であり人間の復権であり、その最先端に行くのが教育である。そういった観点から議論を進めたい。

現在の子どもの状況を示すデータがいくつか示されたが、結果の考察には注意が必要である。例えば、「人の気持ちがわかる人間になりたいか」「普段テレビを見る時間」などの項目については、子どもは望ましい答えがわかるからそちらに回答が引きずられる傾向がある。また、「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦するか」など小中で差が大きい項目も、より慎重になるなど成長の結果とも考えられるので、一概に数字の高低だけを見てよいとか悪いとか言うことはできない。さらに、学生に学ぶ意欲がほとんど見られないなど危機的な状況にある大学の話も聞いており、大学への進学率が高いというだけでよしとすることはできない。

今の学生は周りに気を遣いすぎていることが気になる。京都に限ったことではないと思うが、いじめやトラブルに敏感になっていて常に周囲にあわせなければならないようだ。

今の若者の悪い面の話が多く出てきているが、一方で、クリエイティブで情熱に溢れている素晴らしい若者もいる。また、人権意識が高いなど今の若者の方がより優れている面もある。子どもたちは高い可能性を持っていることを前提に、そこにある課題をどうクリアしていくかを考えていきたい。

土曜日などに子どもが集まれる場所を地域で設けているが、親との関わりを上手く持てない子どもたちが、大人に甘えたくて集まってくる。自分の子どもにとにかく上を目指すことを強要する親がいる一方で、子どもの食事の準備さえしない親がいて、どちらも子どもに大きな影響を与えているように感じる。

学校や地域では様々な取組がなされているが、この取組が活きるには親のあり方が大事。また、今の子どもに対しても「これから親になるもの」として教育をしていかなければならないのではないか。

P T A等の活動が熱心に行われているが、そうして学校に来る親よりも、学校に来ない親こそが問題を抱えているのではないかと。子どもの問題が学校に押しつけられすぎているが、親への教育こそが必要である。

新入生の保護者と話をするとまるで話が合わないことも多いが、一方的におかしいとか間違っているとかが言うのではなく、まずはじっくり話を聞いてあげて、気持ちを分かっ

てあげた上で、こういう考え方もあると示してあげなければならない。

教育基本法の改正により、保護者が子の教育について第一義的責任を有すること、行政は家庭教育を支援するよう努めなければならないことが明記された。親のための応援塾などの取組も既に進められており、プランには学校と家庭と地域との連携などについてどんどん盛りこんでいくべきである。

教育の抱える大きな問題は、モチベーションが弱くなったこと。昔と比べて高い教育を受けることが当たり前になっているばかりか、嫌々学校に通うような状況で、学ぼうとする動機付けが親にも子どもにも弱い。非常に難しいことだが、そこにどう踏み込めるかが課題である。

「大学を出なければ一人前ではない」とか「大学まで出たのにそんな仕事はふさわしくない」とする風潮があるように思う。誰もが一律に国語や数学をできるようになる必要はなく、植物や動物を育てることがうまい子どもはその力を、小さな子どもの面倒を見ることがうまい子どもはその力を、というように、それぞれの力を尊重して伸ばしてやるのが真の教育である。

「高校卒業後フリーター等になる者が5%」という府のデータがあって問題視されているが、大学進学率の高さから考えると、単にそれが大学卒業まで先延ばしされているだけとも考えられる。今の子どもたちには将来の展望がない。自分をよく知らないから職業選択ができない。今回策定するプランでは、自分自身をよく理解させることを目指してはどうか。

進路決定には、能力を重視するドイツ式と、自己の希望を重視するアメリカ式があるが、日本には日本式の自我探しがあってしかるべき。日本人が古くから持つ帰属意識、例えば、京都人であること、この地域、この家族の中で生まれ育ったことなどの中から、自分の責務や可能性が見えてくるのではないか。日本式の自我探しの手本を我々がプランのなかで提案できればよいのだが。

今の日本を見ていて不安になるのは、テレビが普及して東京の文化が主流とされる中で、帰属意識の基盤となるものを見失っていること。教育こそがその再発見につなげることができる。例えば人類最高の英知である古典を学ぶことも手法のひとつ。

「何をしたらいいのかわからない」という子どもに、「とりあえず色々な経験をして、そのうちに自分が心を惹かれるようなものに出会ったときに打ち込めるように、今は勉強して力を付けておきなさい」ということくらいしか自分は言えないのだが、子どもたちに夢を持たせられるような教育が必要である。

大学生の子どもが就職難のまっただ中にある。親として手をさしのべることは出来たことはないが、それでもこの子がどのようにこの挫折を乗り越えていくのか見守ろうと考えている。ここを乗り越える力があれば将来どんなことがあってもやっていけると思う。厳しい時代はこれからもまだまだ続くと思うので、そんな時代に対応できる強い心を育

てる教育を進めてほしい。

「心の教育」というと何かこうほわっとしたもののようなイメージもあるが、強くしなやかな心、挫折を乗り越えるたくましさなどを身に付けさせることも必要。

フィンランドやスウェーデンでは、心の教育をしっかり行った上で、そこに学力を伴わせる取組が行われている。心の教育と学力をつける教育をバランスよく行っていきたい。

まったく読書をしない割合が中学校でどんと増える一方、テレビの視聴時間は非常に長い。これが現下の子どもたちの情報への接し方である。人間は本来、五感や第六感を持っているのに、視覚と聴覚に頼りすぎてそれ以外の感覚がだめになり、生物としての人間が弱くなっている。根幹的な生きる力をもっと大切にする子どもになってほしい。

基礎的な生きる力として、土の感触や土の匂いなどを人間の五感で感じさせるような教育を子どものうちから進めていくべきではないか。死が身近なものでない今、生命の重さを教える教育も大切である。テレビなどの情報ではなく、生で体験させることが必要。

明日の京都ビジョン懇話会で出た意見で、「生涯にわたって学び続ける人間」というものがある。卒業した学生の状況を聞くと、新卒時とは違う職業についてバリバリ働いている者やベンチャーを立ち上げた者、子育てをしている者などがあり、皆が新たな学びを経験している。初めの就職が生涯を決めるのではなく、後でいくらかでも修正が利く世の中に変わってきているように思う。また、そうした若者に育ったのは、色々な場所で色々な体験をさせてもらったことが大きい。

インターンシップ・職業体験の取組はよい。社会のしくみがよく分かるし、自分の親がどんなに苦労して働き、子どもを育ててくれているのか理解できる。

先程示されたデータを見ると、府内の小学校の現状は概ね良好であるが、中学校になると途端に課題が多くなるようである。

学力上位の秋田にあって京都にないものはコミュニケーションではないか。秋田のある学校には「この番組を親子で見ても、家庭内で話し合いをしてみましょう」などのマニュアルがあるという。「家庭でコミュニケーションをとりましょう」というだけではなく、具体的にテレビという手法を使ってどのようにコミュニケーションを取ればよいか示すもので、取組の参考になるのでは。

コミュニケーションについては、子どもに社会とのコミュニケーションをとらせることも必要。職業体験などの取組に加えて、例えばまちなかの文化イベントに学校として参画するなどの取組ももっと積極的に行うべきである。